

12月8日「まず御言葉を！」列王記上 22：1~5、ヨハネ福音書 5：36~47

今日は列王記から、大きな決断を迫られたユダの王が「まず御言葉を求めるように」と願った言葉が選ばれていました。イスラエルの国がサウル、ダビデ、ソロモンと3代続いた統一王国から、内乱によって北のイスラエルと南のユダに分かれてしまった時代の物語です。北イスラエルは王アハブ、南ユダは王ヨシャファトが治めていました。この時代は隣国アラムとの戦争に明け暮れていました。イスラエルの王アハブはアラムに奪われた領土を取り返すために、ユダの王ヨシャファトに「わたしと共に行って戦ってくれませんか？」と頼みました。ユダの王ヨシャファトは立場が弱かったからか、同盟関係を崩したくなかったのか「わたしはあなたと一体、わたしの民はあなたの民と一体、わたしの馬はあなたの馬と一体です」と答えます。しかし、彼はもう一言付け加えました。「まず主の言葉を求めてください」これから戦争を始めるかもしれない、大きな決断の前に預言者たちの言葉に耳を傾けることを求めたのです。

そこで、イスラエルの王アハブは国中の預言者400人を集めて「戦いを挑むべきか、今は平穏を維持すべきか」を神に尋ねさせました。当時の預言者たちの役割の一つは、戦争に勝てるかどうかを神に伺い（占いに近い）、王の勝利を神に祈ることでした。すべての預言者たちが王の勝利を預言しました。（要は王に付度しておべんちゃらを使った）。けれども、たった一人、王に災いを告げる者がいました。それが預言者ミカヤです。彼は王にどれほど脅されても、自分を曲げず、正しい神の言葉を、アハブ王への裁きを告げました。と言うのも、アハブは決して神さまの御心に適う良い王ではなかったからです。彼は、妻イザベルにそそのかされ、外国の異教の神々を拝んでいました。また、自分の宮殿近くの畑を手に入れるために善良な者を陥れて殺して、その畑を奪取ったのです。偶像崇拜と不正に満ちた非常に悪い王だったのです！預言者ミカヤは、王の使いの者たちから「どうかあなたも王に幸運を告げてください」と付度を求められます。けれども、彼は王を恐れず、神の御旨に従って、裁きを告げました。その結果、ミカヤは牢屋に繋がれることとなります。しかし、彼の告げた裁きは現実のものとなり、驕り高ぶったアハブは裁きの言葉通り、戦争で討ち死にすることになるのです。

今、毎週木曜日の祈祷会では創世記のアブラハム物語を読んでいます。先週はちょうどイサク奉獻の記事でした。そこで、アブラハムがイサクを奉げた時（献げようとした時）イサクは何歳くらいだったのか・・・と言う話になりました。ある方は（たぶんインターネットで調べて）30歳くらいという説を話されました。ある方は、絵画を見て「ずいぶん若いようだ」と言われました。それぞれ、根拠もあって悪くはないのですが、

ちょっと立ち止まってみてください。私たちはインターネットを信じているのでしょうか？あるいは、絵画を描いた画家を信じているのでしょうか？そうではないと思います。私たちは「聖書」に現された神の御言葉を信じているはずで、私たちは御言葉そのものを手にしています。他の情報を頼る前に、まず、聖書に聞いて欲しいと思います。聖書を読むと、イサクは結婚する直前だと分かります。当時の結婚は14~15歳でしたから、30歳はありえません。また三日の旅をして薪を担いで山を登ったことが書いてあります。ということは、幼すぎる子どもというのもありえません。おそらく少年と青年の間くらいだったことが聖書を良く読めば分かるのです。聖書が母国の言葉に翻訳され、私たち一人一人の手許に届くまでには、ルターの宗教改革を経た、先人たちの苦勞と戦いの歴史があります。この恵みに感謝して、まずは御言葉を聴く！この姿勢を持ち続けて欲しいと願います。

今年度、私たちの教会は長年同じ宗教法人で運営してきた愛光保育園を社会福祉法人にすることを決めました。非常に大きな決断で、私は本当に悩みました。この数日間もそのために、小さな決断をたくさんしました。私たちは、個人に於いても、集団においても、大きな決断を迫られることがあるでしょう。その時に私たちは何を基準に判断しているのでしょうか？周囲の評価？専門家の意見？特に昨今は、情報化社会といわれます。インターネットを通じてたくさんの情報が溢れていて何が真実か分からないことがあります。別に今夜の外食先くらい、食べログで調べても良いですが、人生の大事な決断をインターネットの情報ですするというのもどうか？とも思います。私たちには一つ大きな指針があることを忘れてはなりません。私たちがキリスト者であるということは、御言葉に従って生きる決意をしたということです。私たちは、隣国の王に迫られて困ったときにヨシャファトがしたように「**まず御言葉を求める**」のです。この部分をすっ飛ばしてしまえば、私たちは何処に神の御心があるのか分かりません。露頭に迷うことになってしまいます。

先日、130周年記念礼拝の折に、野田和人牧師は最初の弟子たちの召命の物語を語られました。「人間をとる漁師にしよう！」この主イエスの言葉に真っ先に従った、そんな歩みの物語を語られました。130年を迎えて、大きな決断もした私たちにもふさわしい御言葉であったように思います。ご一緒にそのように歩みたいと願います。

まず、聖書の御言葉に聞く！ここまできたら、実は次の課題があることに気付かされ

ます。今日のイエスの言葉です。「ヨハネ 5：39～40 あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。それなのに、あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしない。」

イエスがユダヤ人のお祭りがあったのでエルサレム神殿にお参りに行った時のことです。ベトザタという池の周りにはたくさんの人達が集まっていました。そこはおそらく間欠泉が噴出している泉で、時々、水が噴出すタイミングでぶくぶくと泡が出る。人々はそれを天使が現れていると信じていて、その間に池に飛び込めば病気が治ると信じていました。そこには、病気の人や、障がいを持つ人、身体の麻痺した人など、大勢の病人達が集められていたのです。イエスはそこで 38 年間も寝たきりのまま置き去りにされていた一人の男性を癒して、立ち上がらせました！人々は大変驚き、大騒ぎになりました！しかし、そこで議論が起きたのです！イエスが病人を癒したのは、ユダヤ人たちが絶対視する「安息日」だったのです。ある人達は言います。「こんなに素晴らしい業が出来るからにはこの人は救い主に違いない！」一方である人達はいいます。「あいつは安息日を破った大罪人だ！殺してしまえ！」

皆さんはどう思われるでしょうか？ここで考えたいのは、どちらか一方がふざけていたり、無神論者だというわけではないのです。どちらの立場も、聖書に一生懸命に聞いていたのです！一方はイエスの癒しの業に目を留め、一方は安息日の規定に目を留めた、聖書の中のどの部分に目を留めたのか、という違いが全く異なる立場を産み出したのです。「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。」イエスも自身を批判した人達が聖書を熱心に研究している者だと認めています。だから安息日の規定は一生懸命守り、神殿では一生懸命祈り、礼拝します。それなのに、もしかしたらそれゆえ、ある決定的なものが欠けていたのです！だからイエス様が本当の救い主であることが分からなかったのです。いったい彼らには何が欠けていたのでしょうか？

「41 節 あなたたちの内には神への愛がないことを、わたしは知っている」彼らには勤勉さも、真面目さも、熱意もすべて足りていました。しかし本当に大切な「愛」が抜け落ちていたのです。だから救い主に気付けなかったのです。

私たちもこの御言葉に心を留めたいと思います。私たちのように、キリスト教の文化的な背景が薄い国に居ると、イエスに敵対する者と言えば、キリスト教に理解の無い人だったり、神を信じない人だと思いがちです。でもそうではない！聖書が命の言葉であ

ることを信じ、研究していた者たちだからこそ、イエスの本質を見逃してしまったのです！イエスの本質は「愛」でした。人間の想像を遥かに超えた、神の愛だったのです。人間が頼りにするような安息日の規定には縛られません。むしろ病によって縛り付けられていた人を長い長い苦しみから解放されたのです！私たちはこの方の「愛」に学びたいと思います。イエスの最も大切な掟です。「隣人を愛しなさい！」これ以上の掟はありません。ただ御言葉に聴くだけではありません。愛をもって御言葉に聞くとき、私たちはイエス・キリストに、永遠の命に近づくことが出来るのです！

最後に週報にも報告を載せましたが、昨日の、子どもの教会クリスマス会には大勢が集まりました。毎年増え続けています。「大したことはしていないはずなのに、なぜだろう」と思っていたら、参加されたある方がこう話してくれました。「せっかくの休日に家に子どもと二人で居ても、テレビを見せるだけで終わってしまう・・・」結構こういう感じの方が多いのかもしれません。習いごとやお勉強ではなくて、ゆったり集まって、みんなで子どもたちを見守って、気兼ねなくおしゃべりして、温かい気持ちで帰っていける、そういう余裕のある場所が社会にはないのかもしれませんが、それは、かなり深刻なことです。

日本は先進国のなかで最も教育にお金をかけない国です。子どもたちをほったらかしにする国です。イエスは 38 年間も池のそばにほったらかしにされた人を、その重荷から解放して、立ち上がらせました。イエスは自分を批判する者たちに言います。「**5：17 わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。**」 私たちもクリスマス会に子どもたちが集まってくる現状に目を向けたいと思います。今、ここにも神が働いておられるのではないのでしょうか？今、子どもたちと親たちに必要なのはクリスマスプレゼントではないのかもしれませんが。チキンやコーラではないのかもしれませんが。競争や学習ではなくて、安心して、一緒に集まり、ゆったり過ごせる、そんな当たり前の居場所です！私たちの教会はそんな場所になれるかもしれません。私たち教会が神の働きにどのような愛をもって、応えていくのか、それが今問われていることだろうと思うのです！御言葉に聴きながら、共に考えていきたいと願います。